

## 神奈川県スポーツ賞

### ●レスリング●

にいくら

**新倉 すみれ** (20歳)



2022年天皇杯全日本レスリング選手権大会において、女子フリースタイル72kg級で2大会連続の優勝を果たした。

横須賀市出身。中学校の部活動では陸上部に所属し、砲丸投げに打ち込んでいたが、中学2年の時にレスリングと出会う。地元のクラブで練習に励むとめきめきと頭角を現し、全国中学生選手権や全国中学選抜選手権など数々の全国大会で活躍し、その後レスリングの強豪校である安部学院高等学校に進学する。

高校3年の時、コロナ禍による国内大会の中止、スパーリングが思うようにできないなどの事態に見舞われるが、両親の大きな支えもあり、ロープ登りやランニングなど、自宅でトレーニングを継続し、鍛錬を積み重ねた。

神奈川大学に進学すると、レスリング部には重量級の女子選手がいない環境であったが、温かくも厳しい仲間に恵まれ、持ち前の不屈の精神で、力の強い男子選手と切磋琢磨し、着実に力をつけていく。

2021年ジュニアクイーンズカップ、全日本学生選手権で優勝し、2022年にはU23世界選手権で銅メダルを獲得して才能を開花させ、世界トップレベルの選手へと成長した。

神奈川県ゆかりの新倉選手は、世界選手権でのメダル獲得に向けて、これからも進化し続ける。

神奈川大学3年生  
[横須賀市在住]

## 神奈川県スポーツ賞

### ●水泳（200m平泳ぎ）●

なかざわ      みな  
**中澤      海凧**（17歳）



今年8月に北海道・野幌総合運動公園水泳プールで行われた全国高等学校総合体育大会水泳競技大会（インターハイ）において、女子200m平泳ぎで2連覇となる優勝を果たした。続く世界ジュニア水泳選手権（9月）においても同種目で銀メダルを獲得し、まさに世代を代表する選手である。

幼少期からダンロップスポーツクラブで水泳をはじめ、小学校4年生で全国大会初出場。以降多くの全国大会に出場している。藤沢市立第一中学校卒業後は水泳の名門、日本大学藤沢高等学校に進学し、才能が大きく開花する。全国高等学校総合体育大会水泳競技大会において200m平泳ぎで高校1年ながら決勝進出を果たし入賞すると、2年生、3年生と連覇を果たす。ジュニア日本代表にも選出され、2023年1月に行われたオーストラリア遠征では2冠を達成し、同年9月の世界ジュニア選手権では各国のトップ選手と互角の勝負をして見事銀メダルを獲得した。全国ジュニアオリンピック大会や国民体育大会においても多くのメダルを獲得している。

既に世界を舞台に活躍している中澤選手は、2024年パリオリンピック出場を目指してトレーニングに励んでいる。今後の活躍が大いに期待される。

日本大学藤沢高等学校3年生  
[藤沢市在住]

## 神奈川スポーツ賞

### ●水泳●

## 日本大学藤沢高等学校



今年8月に行われた全国高等学校総合体育大会水泳競技大会（インターハイ）において、女子4×100mフリーリレー、女子4×100mメドレーリレー、女子総合で2連覇という輝かしい成績を残した。

第1日目、女子200m個人メドレーで笹目（3年）が6位入賞、戸津川（2年）が7位入賞、200m平泳ぎでは中澤（3年）が2連覇となる優勝を果たした。さらに、女子4×100mフリーリレーでは、大会新記録で優勝した。

第2日目、女子50m自由形で溝口（3年）が悲願の優勝を果たすと、平井（2年）も6位入賞、女子200m自由形で笹目（3年）が4位入賞、女子100m背泳ぎでは、山本（2年）が銅メダルを獲得するなどチームを波に乗せた。

第3日目、200m背泳ぎで山本（2年）、100mバタフライで平井（2年）が優勝、100m平泳ぎでは中澤（3年）が4位に入賞した。また、女子4×200mフリーリレーは準優勝した。

最終日、最終種目の女子4×100mメドレーリレーは、一進一退の展開であったが、アンカーの溝口（3年）が強さを見せ、見事接戦を制し大会新記録で優勝した。学校対抗の女子総合優勝は、出場選手の多くが入賞を果たし、サポートメンバーを含めチーム一丸となって勝ち取った栄光であった。

常勝チームとして躍動し続ける水泳部は、今後も大いに活躍が期待できる。

[所在地 藤沢市]

## 神奈川スポーツ賞

### ●硬式野球●

## 慶應義塾高等学校野球部



明治21年に創部された野球部は、令和4年度までに選抜高等学校野球大会に10回出場、全国高等学校野球選手権大会に18回出場（1回優勝）している伝統校である。

今年、同校野球部は、第105回全国高等学校野球選手権記念大会において、107年ぶり2度目の優勝を果たした。

初戦の北陸（福井）に9－4、続く3回戦の広陵（広島）に延長タイブレークの末、6－3で競り勝った。準々決勝の沖縄尚学（沖縄）に7－2で第6回大会（1920年）以来103年ぶりのベスト4進出を決めると、勢いに乗ったチームは、準決勝の土浦日大（茨城）に2－0で決勝戦進出を決めた。

決勝戦、大会史上初となる丸田湊斗（まるたまなと）の先頭打者本塁打で勢いに乗り、3－2で迎えた5回に5点を奪って突き放した。先発の鈴木佳門（すずきかもん）が4回を2失点でしのぎ、5回から登板の小宅雅己（おやけまさき）は5回無失点の好投、8－2で快勝し、今春の選抜大会で敗れた仙台育英（宮城）に雪辱した。

より高いレベルの野球を楽しむ「エンジョイ・ベースボール」を掲げるチームは、今後の活躍も大いに期待される。

[所在地 横浜市]